



ヒゼキア王の水道トンネル

土木遺産の香 第64回

聖都を支えたヒゼキア王の手掘りの水道トンネル イスラエル・エルサレム



日本工営株式会社 / コンサルタント海外事業本部 / チーフプランナー
山田 耕治 / YAMADA Koji

歴史都市エルサレム

地中海に面するイスラエルの都市テルアビブから内陸に入り、標高800mほどの丘陵の上にエルサレムはある。一帯は年間の降水量が600mm程度の乾燥地域で、岩石が風化した黄土色の荒野である。

エルサレム旧市街地は1981年にユネスコの世界文化遺産に登録されている。エルサレムはキリスト教、ユダヤ教、イスラム教のいずれの宗教にとっても重要な聖地である。キリスト教の史跡には「聖墳墓教会」が、ユダヤ教の史跡には「神殿の丘」と「嘆きの壁」が、イスラム教の遺跡には「岩のドーム」などがある。しかしそれらは複雑に交差しており、ユダヤ教の聖地「神殿の丘」の上にイスラム教の「岩のモスク」が建つ。

エルサレムは紀元前30世紀頃、既に古代バビロニアの文書にウルサリムとして登場する。紀元前1000年頃、第2代ユダヤ王となったダビデが群雄割拠の南北イスラエルを統

一。そして、王国のほぼ中央に位置したエルサレムに侵攻し、ここに神殿を築き、ユダヤ王国の首都とした。なぜ、内陸の乾燥地にあるエルサレムは、歴史上重要な都市としてあり続けることができたのであろうか。

エルサレム攻略

ダビデ王がエルサレムを攻めた頃、エルサレムはエブス人の住む小さな町であった。『旧約聖書』のサムエル記などによれば、攻略の日、ダビデ王は「エブス人を撃つものはすべて『ツインノール』をもってせよ」と言ったと書かれている。このツインノールという語は長らく大滝とか激流、あるいは水路などと訳されていた。町の水源地は崖下にある「ギホンの泉」と呼ばれる湧水で、これは今でも水が湧き出している。

この地域の要塞都市では、外敵から守るために貴重な水源となる泉を地下に隠し、トンネルを掘って直接水を汲めるようにした例が少なくない。おそらくギホンの泉も注意深く隠



写真1 金色に光り輝く岩のドーム (左) と嘆きの壁 (中央から右)



写真2 イスラムの聖地「岩のドーム」はユダヤの神殿の丘に建つ

され、外からは見えないようにされていたのだろう。その水源に至る地下トンネルがツインノールだと解釈された。つまり、ダビデ王は地下トンネルから攻め上がった、と考えられている。あるいは、山本七平が推測するように「まずは地下トンネルを叩きつぶして水源を絶ってから町を攻めよ」とダビデ王は言ったのかもしれない。

ウォレン・シャフトの発見

1867年、イギリスの派遣した調査隊のウォーレン中尉が、ダビデの町の丘から、その下方にあるギホンの泉に向かう地中のシャフト (堅坑) を発見した。発見者の名前を取って「ウォレン・シャフト」と呼ばれる。

ウォレン・シャフトはエルサレムでもっとも古い遺構の一つとされ、現地の説明板によれば「紀元前18世紀に既にここに住むカナン人がギホンの泉からトンネルで水を引き、要塞でこれを覆っていた」という。すなわち、ダビデ王がエルサレムを攻めた時には、すでに地下に隠された湧水に至るトンネルが貫通していたことになる。ただし、ウォレン・シャフトやツインノールをめぐる議論には、なお異説もある。

地下に隠された水源

「水源を地下に隠して守る」という発想はエルサレムにとどまらない。たとえばエルサレムの北9kmほど、パレスチナ自治区にある「ギベオンの水槽」もその一つである。『旧約聖書』にも「ギベオンの大池」として登場し、ダビデ王が敵軍と対峙した場所である。

ギベオンの水槽は、粘土質の地

面に、直径・深さともに11mほどの円筒状の穴をくりぬいて造られている。穴の周りに幅1.5mほどのらせん状階段が地面から穴の底まで繋がり、さらにそこから地下にトンネルが伸び、14mのところ地下水面がある水室に繋がっている。紀元前10世紀頃に建造されたものである。

ソロモン王のエルサレム神殿

ダビデ王の死後、息子のソロモンが即位し、軍事と貿易により富を蓄積した。ソロモン王はダビデの町を北側の丘にまで拡張し、ここに神殿と王宮を建造した。北側の丘を神殿拡張の場所として選んだのは、ここに祭壇にふさわしい巨大で平らな岩があったからだ。

神殿の建設には、ダビデ王の要塞を手がけたフェニキア人の建築家あたり、7年を要したという。また、王の居城や王家の建物を含む王宮の建設にはさらに14年を要したという。これが後の時代に「岩のモスク」が建造される神殿の丘となる。



写真3 上から見たウォレン・シャフト



写真4 地下に掘られた円筒状のギベオンの水槽

ヒゼキア王の首都防衛

ソロモン王の死後、王国は南北に分裂し、エルサレムは南のユダ王国の首都となった。しかし、アッシリアが北の王国の領土を奪い、南のユダ王国にも攻勢をかけた。ユダ王国ではヒゼキア王が即位し、アッシリアの脅威に対抗するためにエルサレムの防御を固めた。

ヒゼキア王の功績の一つは、エルサレムの水源であったギホンの泉の水を、城内のシロアムの池まで引くトンネルを完成させたことである。

ギホンの泉は、ダビデの町と向かい側のオリーブ山の間を分かちぎドロンの谷にあり、その場所はダビデの町の崖下にあたる。当時、ギホンの泉からあふれ出る水は地表のシロアムの水路を流れてシロアムの池に流れ込んでいた。この水源を外敵から守るためにトンネルを掘りぬいたのである。

世界最古の水道トンネル

ヒゼキア王のトンネルは約2700年前に建造された、現存する世界最古の水道施設の一つである。全長532m、勾配は0.4%、両側から掘りはじめ、北から1/3あたりで接合している。接合部では、両側から声を出しながら方向を調節したのか、坑道が左右にギザギザと屈曲している。このトンネルは現在も健在で、ギホンの泉は下流のシロアムの池に向けて流れ続けている。

1880年、下の池で遊んでいた子供たちが、池の出口から6mほど入ったトンネルの壁に、見慣れない文字の書かれた碑文を発見した。これが「シロアム碑文」と呼ばれるもので、トンネル掘の夫夫たちが貫通の喜びを古代ヘブライ語で刻んだものである。「掘りぬいた！これは掘りぬきの由来である」と始まる碑文は、現在、イスタンブールの博物館に所蔵されている。

首都防衛策が功を奏し、ヒゼキア王はアッシリアの包囲戦（紀元前701年）を乗り越えて持ちこたえた。エルサレム防衛にあたった者は、「アッシリアの王たちに攻めいらせ、豊富な水を見つけさせてたまるものか」と言ったそうである。アッシリア軍は完成したばかりの水道トンネルを知るよしもなかった。

ダビデの町の地下トンネル

現地を歩いてみる。エルサレム旧市街地の南東側、糞門から徒歩5分ほどのところにある「ダビデの町センター」

で申し込むと、3時間ほどの「ダビデの町ツアー」に参加できる。ツアーは、まずCGを駆使した3次元ムービーでダビデの町の歴史を振り返った後、トンネルに入る。途中、真っ暗な坑内の足元に、ぽっかりと垂直の穴が見え、これがウォレン・シャフトである。さらにトンネルを下ると、丘陵の斜面から屋外に出る。ここからさらに通路を下りて行くと水源を覆う塔や池の遺跡を見ることができる。

ヒゼキア王の水道トンネルを歩く

このツアーでは、ヒゼキア王の水道トンネルを実際に歩くことができる。トンネルは今でもギホンの泉から湧き出た水が流れており、下の池までを一直線隊で歩く。水深は深いところで腰のあたりまでである。暗い中、懐中電灯を手に水の中をじゃぶじゃぶと歩くこと約15分、少し心細くなる頃に出口の光が見えてくる。



写真5 ダビデの町からギドロンの谷を見下ろす

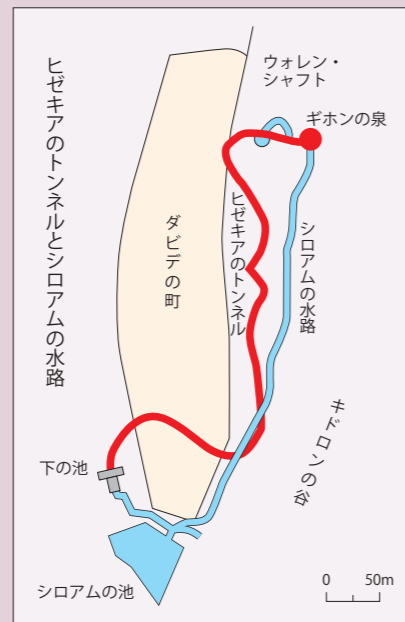


図1 ダビデの町とヒゼキアの水道トンネル



写真6 ウォレン・シャフトに繋がるトンネル



写真7 ウォレン・シャフトを覗き込むツアー参加者

ヒゼキア王の時代は既に鉄器があったので、鉄の鑿や槌で掘り進んだのだろう。トンネルの側面には鑿跡が無数についている。もちろん手掘りであり、苦勞が伺える。

長方形に掘り込まれた半地下の空間に水は流れ出る。この池は長らくシロアムの池と考えられていたが、最近ここから100mほど下流に遺構が見つかり、それがシロアムの池とされたため、トンネル出口の池は単に「下の池」と呼ばれる。

その後のエルサレム

アッシリアの攻撃にはかろうじて耐えたエルサレムであったが、紀元前598年には新バビロニア王国により破壊された。この後、紀元前37年にローマ帝国に忠誠を誓うヘロデ王がユダヤの王となった。ヘロデ王はソロモン王が築いたエルサレム神殿を紀元前20年にふたたび大規模に拡張・整備した。ちなみに現在、ユダヤ教徒の来訪が絶えない「嘆きの壁」は、このヘロデ王が築造した神殿を取り巻く外壁とされる。

ヘロデ王の統治下、イエス・キリストが布教を始めるが、ユダヤ教からは異端者として迫害され、エルサレムで捕らえられた。キリストが絶命したゴルゴダの丘には聖墳墓教会が建てられ、今でも礼拝が絶えない。



写真8 水道トンネルの出口「下の池」



写真9 ダビデ王時代の遺跡

エルサレム陥落とイスラム化

紀元70年、ローマはユダヤの神殿に火を放ち、エルサレムは陥落する。ユダヤ教徒は故郷を離れることを強いられ、長いディアスポラ（離散）の時代が始まった。

さらに638年、エルサレムはアラブ軍により征服され、その後1300年にも及ぶイスラム教徒の支配が始まる。イスラム教にとってエルサレムは、預言者ムハンマドが一夜のうちに昇天する旅を体験した場所で、その場所はユダヤの神殿があった丘である。ここにはウマイヤ朝の時代に岩のドームが築かれ、今でもイスラムの重要な聖地の一つである。

イスラエル建国とパレスチナ問題

第二次世界大戦後、1948年に第一次中東戦争が勃発する。その後、ヨルダン川西岸地区とガザ地区を中心にパレスチナ自治区が設けられ、さらに独立国家の道を模索し、現在にいたる。パレスチナ自治区では地下滞水層からの水利用を厳しく制限されるなど、水をめぐり確執が今も収まらない。

乾燥地における水は、土地そのものよりも重要であるといわれる。そのことは、長きに渡るエルサレムの水の確保の歴史が証明している。

<参考文献>

- 1) 『聖都エルサレム—5000年の歴史』関谷定夫 東洋書林 2003年
- 2) 『エルサレム（世界の都市の物語14）』高橋正男 文芸春秋 1996年
- 3) 『聖書の旅』山本七平 文春文庫 1991年
- 4) 『図説 エルサレムの歴史』ダン＝パバト（高橋正男訳）東京書籍 1983年

<図・写真提供>

図1 『聖都エルサレム—5000年の歴史』の資料を基に作製（株式会社大應作製）
写真 筆者